

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530821

研究課題名(和文) 喪失体験に関わる対人援助者と被援助者の関係解消及び関係修復過程に関する縦断的研究

研究課題名(英文) An exploratory research on structures of repairing processes of relationships between the bereaved family members and those who are in charge of supporting them

研究代表者

増田 匡裕 (MASUDA, Masahiro)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：30341225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、周産期医療の現場における医療従事者と当事者家族との関係が悪化・改善するターニング・ポイントについて、ナラティブ分析を用いて探索的に調査することである。「『喪失体験』を語る体験」について、8人のインフォーマントを対象に非構造化面接を実施し、対人援助者と被援助者間の関係の変化の過程の構造を分析した。当事者が構成した「大切な家族を失ったこと(意味)」の重要性と対人援助者側の「モノ扱い」とが相反する遠心力と、双方の共同による意味構成を求める求心力が入れ替わる力動的な構造が見出された。

研究成果の概要(英文)：The present research is aimed at uncovering structures of ebbs and flows of relationships between the bereaved family members who lost their kids and those professionals who support them; that is, how their relationships are deteriorated and repaired. Eight informants participated in narrative (unstructured) interview research, and provided narratives about their unique experiences of their narratives on loss; how they felt when they had talked to various audience including health professionals about their loss events, and what they had thought of audience's responses. Narrative analysis described the developing processes of the relationships between the bereaved and their audience, and uncovered alternately changing dynamic structures consisting of both centrifugal forces separating one from the other and centripetal forces connecting each other.

研究分野：対人コミュニケーション論

キーワード：グリーフケア(悲嘆ケア) 対人関係の発達過程 ソーシャル・サポート ナラティブ

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究課題「喪失体験に関わる対人援助者と被援助者の関係解消及び関係修復過程に関する縦断的研究(23530821)」は非常に野心的な試みとして計画された。本研究課題が計画された平成 22 年 10 月の時点において、グリーフケア(悲嘆ケア[grief care])に対する対人援助職、特に医療従事者の関心は次第に高まっており、坂口(2010)のような総合的な入門書も出版されていた。特に周産期におけるグリーフケアについては、『誕生死』(流産死産突然死で子どもを亡くした親の会, 2002)の出版以来、当事者の生の声に耳を傾けたいという助産師・看護師・産科医・小児科医が次第に増え、学習会・講演会・研修会などの開催も増えてきた。当事者と医療者の交流が進むと、当事者の声の多くが自分たちに対する反感であることから、グリーフケアに対して不信感を持つ医療従事者が現れる一方、グリーフケアが単なる技術や情報として扱われることに不満を持つ当事者も現れた。本研究課題は、両者の相互不信・不満を低減して信頼関係を構築するためのコミュニケーションのあり方を調査するものであった。

(2)本研究課題は上記のような現場のニーズを受けた実用性への期待から計画されただけでなく、対人社会心理学や対人コミュニケーション論への理論的な貢献への野心的な試みからも計画されていた。対人関係の研究には対人葛藤の解決の研究は多いが、増田(2001)が指摘したように、一旦損なわれた関係を「修復」する過程の研究は稀であり、それを説明する理論的な試みも少ない。本研究課題が縦断研究として計画されたのは、その過程を調査するのに最も適したものと考えられたためである。

(3)上述のような野心的な取り組みであったにもかかわらず、本研究の実施には想定外の困難が伴い、結果として縦断研究を実施するに至らなかった。この困難な事態は補助金交付が内定した時期から発生しているため、「研究開始当初の背景」として記述する。平成 23 年 3 月の東日本大震災で被害を受けた地域の中に、申請時点で予定していたインフォーマントが多く居住しており、周産期医療の現場のみならず、幅広い現場においてグリーフケアのニーズやあり方が半年間で根本的に変わってしまっていた。従って、本研究課題の研究活動開始時点である平成 23 年度から 2 年の間、激甚災害の影響下にある我が国で、周産期のグリーフケアがどのように変化していくのか、現場に身を置いてそれを見極める必要があった。すなわち、研究開始時点より、本研究課題は、援助者・非援助者にとってグリーフケアとは何なのかを探索的に調査する研究に転換された。

## 2. 研究の目的

(1)本研究は、喪失体験に関わる対人援助職と被援助者間の関係解消と関係修復の過程を双方の視点から分析するものである。理論的には対人関係の修復過程は、「仲直り」と「立ち直り」、すなわち間柄それ自体の修復とパートナー各自の自己の修復の 2 つからなる。前者は葛藤が生じた特定の関係の変化であり、後者は次の対人援助の場面で新しい関係を構築する際の自己過程、対人認知及びコミュニケーションの変化である。本研究は、周産期医療の現場における医療従事者と赤ちゃんを亡くした家族との良好な関係と険悪な関係を比較する縦断的研究を実施して、「仲直り」と「立ち直り」に及ぼす要因及び両者の相互作用を分析し、理論と実践の両立を目指す。

(2)状況の変化に伴い、本研究課題の目的を以下のように修正する。

対人関係修復過程の重要なターニング・ポイントである「仲直り」の動機とコミュニケーションをフェイスワーク(facework)の観点から分析する。

周産期医療の現場における医療従事者と当事者家族との関係が悪化・改善するターニング・ポイントについて、ナラティブ分析を用いて探索的に調査する。

## 3. 研究の方法

(1)対人関係修復過程の重要なターニング・ポイントである「仲直り」の動機と典型的なコミュニケーション方略を分析するために、次のパイロット・リサーチを試みた。質問紙もしくは学内のウェブ学修システムのクwestions作成機能を利用して、51 名の学生を対象に、「果たせなかった『仲直り』の電子メール」を書く自由記述形式の調査を実施した。質問は「僕/私は誤解していました」もしくは「きみ/あなたは誤解しています」のいずれかのフレーズを選んで書き始めるよう求めた。更に、もし機会があった場合に、実際にその「仲直りの手紙」の内容を伝えるかを尋ねた。

(2)周産期のグリーフケアにおける、対人援助者(医療従事者・ピアサポートグループなど)と被援助者との関係が解消に向かうターニング・ポイントと修復に向かうターニング・ポイントを、被援助者のナラティブの構造の分析から明らかにする。そのために、次の 2 つの段階を経る調査を実施した。

医療・福祉系の研究と全く異なる観点の研究を実施するために、これまで関与していた周産期のグリーフケアの現場に入り、より参

与者として役割の大きい立場で参与観察を継続して、プラクティショナーではない社会科学者独自の問題の切り口を見出した。既にスタッフとして参加しているグリーンケアのプラクティショナーのグループの会合に24回参加して、対人援助者と当事者双方(同一人物が双方の立場であるケースも多い)との入念な情報交換を実施した。その他にも、グリーンケアに関する研究会や講演会で情報を収集するのに加え、研究代表者自身が喪失体験のインフォーマントとして、ある看護学大学院生の研究で聞き取り対象になるという体験を通じて、グリーンケア研究の実態を“被験者”の観点から観察した。

参与観察を通じて得られた新たなリサーチ・クエスチョンに基づき、非構造化面接調査を実施した。「『喪失体験』を語る体験」について、8人のインフォーマントから1-2時間の聞き取りを実施し、Riessman(1996)のナラティブ分析法で、対人援助者と被援助者間の関係の変化の過程の構造を分析した。

#### 4. 研究成果

(1)関係修復をフェイスワークと考えた場合、それを求めるのはフェイスを傷つけられた側ではなく、傷つけた側であることが示唆される結果が得られた。51名の学生の「仲直りの手紙」の書き出しの文言と、実際にそれを伝える可能性との間には強い連関が見られた。「自分が誤解していた」と書き始めた回答者の大多数が実際に伝えたいと回答したのに対し、「相手が誤解している」と書き始めた回答者の大多数が実際には伝えたくないと回答した( $\chi^2$  [df=2]=12.8, p=.001)。この連関は、「仲直り」の相手が恋人でも友人でも同様であった。この結果から示唆されたことは有益である。関係の修復は、少なくとも関係が悪化したことの原因を自分に帰属する側から始めるものであり、相手に帰属して始めることは避けられやすい。従って、関係が悪化した原因を自身に帰属できた相手でなければ交渉できないということである。これは、この後の面接調査の分析に有益な結果である。

(2)本研究課題を実施する上で、喪失体験の当事者でもある研究代表者の内観報告は、そのままオートエスノグラフィのデータとなり得る(Ellis, 2004)。この研究期間中のある年度に、あるプラクティショナーを通じて、研究代表者はインフォーマントとして、ある看護学大学院生の修士論文(非公開)の研究に協力するよう要請された。この「インフォーマント」体験で発生したトラブルが、社会のニーズに応える実用的な研究と一般に思われがちなグリーンケア研究のダークサイドを象徴する出来事となった。院生のためのインフォーマント募集で直接インフォーマン

トと交渉した指導教員が、実際にインタビューを始めてから冒頭の数分を断片的に聴取して、「人選ミス」と即断し、インフォーマントのナラティブを強制的に終了させたのである。この出来事により、インフォーマントである研究代表者は精神的なダメージを被り、自身の研究課題を遂行することに困難な状況に陥った。しかしながら、研究代表者は、この「被害体験」を「怪我の功名」に転じることに成功した。喪失体験者が、喪失のナラティブを無用と断じられた経験をするのは、「よくあること」であることは、これまでの慎重なフィールドワークから見聞きしてきたことだからである。「被害体験」を克服する過程で、新しいリサーチ・クエスチョンを見出したのである。

(3)新しいリサーチ・クエスチョンは、「『喪失体験の語り』の体験が語り手と聞き手の関係をどのように構築するのか」という記述的なものである。この中で特に焦点となるのは、「『喪失体験の語り』の『モノ扱い(情報扱い)』を語り手と聞き手はどのように対処するのか」という問いである。この問いは、本研究課題を着想するに至った経緯と、同じ思考過程を経て生まれた。本研究課題申請以前のフィールド研究において、医療従事者に対して自身の喪失体験を語った遺族たちが、「自分と子どものかけがえのない人生」ではなく、「グリーンケアの“お勉強”のための単なる情報のひとつ」として軽んじられた屈辱感と怒りを表出している現実を目の当たりにし、この状況の改善のための研究の必要性を実感したためである。しかしながら、研究代表者自身も、同じ体験をするまで、この問題の深刻さを看過していた。研究者は研究対象及び相互を取り巻く環境から独立した存在とはなり得ないという社会科学の根源的な問題が再確認された。

(4)新たなリサーチ・クエスチョンに基づいて、最終年度(諸般の事情で延長された4年目)に実施された、8名の当事者に対する非構造化面接調査で得られたナラティブの分析の主題は、Baxter&Montgomery(1996)の提唱した対人コミュニケーションの理論であるリレーショナル・ダイアレクティクス(対人関係の弁証法: Relational dialectics)を用いることで、明確な構造が示されることとなった。対人関係の力動的な発達過程を記述する理論であり、人と人とのつながりを、求心力と遠心力の相反する力の緊張関係が形を変えて永続する構成物として分析するものである。この理論の根幹となる3対の弁証法は「統合 分離」「安定 変化」及び「表出 内密」の対立軸(対人関係内部に置き換えると、それぞれ「つながり 分離・独立」「確かさ 不確かさ」「開放 閉鎖」)である。3対のうち主たる対立軸は「つながり 分離・独立」であった。体

験を語れない孤立した時期の自己と同じ体験をした人とつながりたい意思との対比と、聞き手に対する不信感に対して話を聞いてもらったことの喜びと安心感の対比が、語り手と聞き手との関係の発達過程を構成していることが明らかになった。情報を欲しがる医療者やマスコミなどとの関係については、「開放 閉鎖」の対立軸で維持される関係と解消される関係の差異が示された。

(5)8名のインフォーマント中、医療従事者は4名であった。また、医療従事者と協力してピアサポートを実践する経験を持つのが6名であった。特に自身が医療従事者であるインフォーマントの語りには、グリーフ体験者としてのアイデンティティと医療従事者としてのアイデンティティとの、両者のバランスを取る自己過程が見られた。両者が葛藤することはなく、当事者が構成した「大切な家族を失ったこと(意味)」と「モノ扱い」せずどのように医療従事者に伝えるのか、当事者と医療従事者がどこで離反し、どこで接点を作れるのかを探る力動的な構造が見出された。一方、医療従事者ではなくインフォーマントの語りには、医療従事者に対する不信と期待との葛藤が見られる一方、ピアとの不即不離の関係を模索する構造が見られた。

(6)8名のうち、1名のインフォーマントには7か月後に再度の面接調査を行った。語りの主題は「喪失体験の『モノ扱い』への危惧」と、それに対する「『喪失したこと』の意味を共同構成してくれる聞き手への期待」に収斂された。

(7)ナラティブ分析の結果、喪失体験の当事者と対人援助者との関係の発達過程、特に相互不信の後の修復過程の分析には、その前段階として、双方の「グリーフケア」に対する期待の共通点と相違点を明確にすることが必須であることが明らかになった。本研究課題は、研究代表者自身を含む多くの人々に対するさまざまな形態の「喪失体験」の影響を受けて、当初予定されていた研究計画の遂行は不可能となった。しかしながら、この困難を克服する過程で新たな研究課題の着想に至ったことは、評価できるであろう。

#### <引用文献>

Baxter, L.A. & Montgomery, B.M.、 Guilford Press、Relating: Dialogues and dialectics、1996年

Ellis, C.、 AltaMira Press、 The ethnographic I: A methodological novel about autoethnography、2004年

増田匡裕、対人関係の「修復」の研究は有用か、対人社会心理学研究、1巻、2001年、

25-36

Reissman, C.K.、 Sage Publications、 Narrative analysis、1996年

流産死産突然死で子どもを亡くした親の会、三省堂、誕生死、2002年

坂口幸弘、昭和堂、悲嘆学入門、2010年

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 5 件)

増田匡裕、「喪失を語る体験」のリレーションナル・ダイアレクティクス、日本ヒューマン・ケア心理学会第18回学術集会、2015年9月26日、日本赤十字看護大学(東京都渋谷区)

増田匡裕、質的インタビューにおける権力の非対称性を見逃された問題：インフォーマントはインタビューを助けられないのか、日本心理学会第79回大会、2015年9月22-24日、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

Masuda, M.、 Narratives on experiences of self-regulation in speaking of loss events. Poster presented at International Association for Relationship Research Mini-Conference 2015 (Self-regulation and Relationships)、2015年7月8日、アムステルダム市(オランダ王国)

Masuda, M.、 Accounting for wish for reconciliation: Exploratory research on facework in relationship repair. Poster presented at International Association for Relationship Research Mini-conference 2013、2013年10月5日、ルイヴィル市(アメリカ合衆国)

Masuda, M.、 An exploratory analysis of repairing processes of close relationships of Japanese undergraduates: How their closeness recovered and when? Poster presented at International Association for Relationship Research Biannual Conference 2012、2012年7月13日、シカゴ市(アメリカ合衆国)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

増田匡裕 (MASUDA, Masahiro)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：30341225